

研究成果を発信する(2) ～原稿の構想を練る～

本を出したいと思ったら、当然ですが、まずは原稿を準備することになります。博士論文のように、既に各章が揃って一貫したテーマになっている場合は、それを一部修正・加筆すれば本の原稿になります。しかし、そうでない場合は、これまでの論文や学会発表等を一貫したテーマのもとで、つなぎ合わせていくことになります。

複数の著者がいる(編著、分担著)とまた異なりますが、特に単著を出すときには、共通点をもちながらも異なった研究テーマ(科研費課題等)のもとでの成果を活用せざるを得ません。ゆえに、金の糸を発見し、小さな物語(個々の論文等)を編み直して1つの筋書きをもった大きな物語(図書)に仕上げていく工程が不可欠です。まるでサビカスのキャリア構築理論の説明をしているみたいですが、同じようなことだと認識しています。金の糸を見出すことができなかつた場合、それは「本」ではなく「論文集」になってしまいます。

私の経験から、具体的にみてみましょう。京免(2015)は、23編の論文をつなぎ合わせたものですが、博士論文がもとになっており、金の糸は博論を提出した時点でほぼ貫通していました(もっとも、博論構想の段階では何もなく、提出直前で苦労したのですが…)。

一方で、京免(2021)は、5つの科研費のもとで執筆した18編の論文がもとになっています。「フランス」「キャリア教育」という点ではいずれも共通していますが、それ以外のテーマは教師、市民性、評価、連携と異なっていました(図1)。

悩み抜いて考えた縦糸が、副題でもある「学校・教師の役割とそれを支えるメカニズム」であり、さらに「日本との比較」という横糸も加えて、各論文を文字通り編み直しました。前著と違って元の論文をそのまま1つの節や章にすることは難しく、複雑な入れ替え作業をした上で、各章をつなぐ記述を加筆していきました。

メイン・ストーリーの中には位置づけられないものの、筋書きを理解する上で役立つサブ・ストーリーは、「補論」という形で盛り込みました。せっかくの知見を無駄にせず、かつ無理に大きな物語の中に入れることで、糸が切れてしまうことを回避したいと考えたからです。

もっとも、結果としてどこまで一貫性が担保されたかについては、心もとない限りです。判断は読者に委ねるしかありませんが、私自身としては金の糸ではなく銀、いや「銅の糸」になってしまっているような気もしており、改めて物語を構築する難しさを感じています。

さて、博士論文を含めた学術論文を図書にするにあたって、もう1つ欠かせないのが、読者の興味を引き、内容や意義を理解してもらうための工夫です。専門書とはいえ、公刊・市販するからには、細分化された「専門家」ではない研究者や実践者に向けて発信することになります。

例えば、京免(2015)の元になった博士論文の題目は、「フランスの学校教育における進路指導の成立と展開—進路形成に関する機能と変容とその帰結—」ですが、図書ではシンプルさを優先して副題を削除し、悩んだ末に「進路指導」を「キャリア教育」に変更しました。後者は、

(2023年1月掲載)

Webで「キャリア教育」で検索した際に引っかかるようにしたい、という発信上の理由です。そのこと自体には後悔はないのですが、日本の「キャリア教育」とフランスの「進路指導」の関係を整理せずに同じ用語として扱ったことは、後に書評で批判されることになりました。

さらに京免(2015)は、上述したような読者向けのガイドを怠ったため、フランスの研究者から見るとキャリア教育部分がよくわからない、キャリア教育研究者からしてみるとフランス部分がわからない、ということになってしまいました。京免(2021)ではこの点を反省して、フランス／キャリア教育研究それぞれの分野では「前提」とされるような情報も盛り込んだことで、幾分か読みやすくなったのではないかと考えています。

最後に、刊行が決まってからのことになりますが、「あとがき」も重要な本の一部です。私に限らず、本は「あとがき」から読むという人は、少なからずいらっしゃるのではないのでしょうか。そこには、学術論文では読めないような著者の研究に対する想い、熱意、私生活を含めた人生経歴などが書かれており、研究成果そのものではないものの、研究者としての生き方やあり方を知ることができます。私見にすぎませんが、「あとがき」が面白い本は、本文も面白いことが多いと感じています。

もっとも、「あとがき」に書きたいことは、原稿を準備している段階で次々に思い浮かんでくるものですので、あまり心配することもないでしょう。私の場合、感謝をお伝えしたい人が多すぎて、誰にどんな感謝の言葉を書こうか、ということはずっと考えていました。これも、本を書くことならではの醍醐味といえます。逆に、「あとがき」に書くことに困ってしまうようなら、それはまだ本を出版する機が熟していないのかもしれないかもしれません。



図1 京免 (2021) の基本構造

(筑波大学人間系 京免 徹雄)